※ユーザの大会議室を背景にしてください
（ナレーション）プロジェクトは全体的に火を噴いている様子だった。それでもユーザ先での会議ではそれを正直に話す会社はなく、若干の遅れはあるものの、難なく取り戻すことができるといった報告ばかりであった。しかし、そのようなことは可能なのだろうか？自然に考えれば「失った時間は取り返すことができない」と考えるのだが・・・。（ナレーションここまで）
～自社打ち合わせ卓にて～
「正直なところ、おれたちの出しているもの以外はあまり使えない代物らしい。」
全員が「ほっ」っとした表情を見せる。
「ただ・・・。」
三沢が続ける。
「ただ、他のプロジェクトにはない「遅れがひどい」という事実がある。これはみんなも知っているように、ユーザの要望を都度実装しているからにほかならない。だが、進捗管理の上ではこういったところが出てこないんだ。」
「・・・・・。」
全員が黙って三沢の言葉に耳を傾けている。※全員真剣な眼差しで三沢を見ているようにしてください
「そこで、なにか手を打ちたい。どのようなことでもいいとは言わない。あくまで有効な策を考えてほしいんだ。どうだ？」
（皆が考える）※腕を組んだり、あごに手をやったり、天を仰ぐように上を見てみたりしている感じです
「ひとついいですかぁ～？」
なんと、源が最先を発した。
「あのぉ、エリカ前から思ってたんだけどぉ～。なんていうかぁ、残っているところをどんどん作っていくチームとぉ、お客さんの願いを聞いていくチームを分けたらどうかなぁ～？なんて・・・えへへっ☆」
（なぜかテレ笑いをする源）
「！（全員）」
全員がハッとした。そのようなことは考えもしなかったのだ。
「な、なるほどっ。」
三沢は関心とともに、あの源からそのような発言があったことに喜びを感じ、かなり複雑な顔をしていた。※喜びと驚きを足して2で割ったような変な顔です
「あの～、僕からもいいっすかぁ？」
今度は浦成だ。
「今までやってきて思ったのはペア・プロで培ってきた技術や知識、それと共通意識があれば、いまなら一人一人できるんじゃないかなぁ～、って。この状況ならそうするほう

がいいんじゃないかなぁ～・・・なんて・・・。」※後半は、おどおどした感じでモゴモゴという

「・・・・・!」

三沢にとっては二度びっくりであった。まさかこの二人がこのような発言をしてくれるとは、正直、彼らには悪いが思ってもいなかったのである。

「よ、よし、それらを早速採用しようっ！他のみんなもそれでいいな？」

（全員がコクッとうなずく）

「きみたちのこれまで上げた成果から、これなら十分に期待ができると思う・・・いや、できる！いましばらく苦しい戦いが続くが、よろしく頼む。」

頭を下げる三沢。※全員が顔を見合わせ「よし、やるぞ」といった云った感じでうなずきあったりしている

「今こそ技術者としての腕の見せどころだっ。おれたちがソフトのプロフェッショナルだというところを見せてやろうじゃないか！」

「ハイッ！（全員）」

源ただひとりが

「おぉ～！」

と、こぶしを突き上げる。それを見て、全員が笑う。

「ふふっ。それじゃ、はじめるか。まずは割り振りからはじめよう。これ以上は謝っていられないからなっ。」※『ニヤリ』といった笑い・・・というのでしょうか？そういう顔をしてください（最初の「ふふっ」は、源のところでの笑いです←親が子のしぐさで笑うような感じ）

（ナレーション）チームが一つにまとまったようだ。三沢はまたひとつ成長を遂げた。それは他でもない、『部下に意見を求める』というところにあったのだ。もちろん、それを“すぐ実行すること”でまとまったのはいうまでもない。（ナレーションここまで）

『『走為上』は最終手段だよな・・・。きっと、無策にものごとを進めた結果でそうなるんだろうな。」

ポツリとつぶやく三沢。まったくそのとおりである。無策、もしくは相手が上手のとき窮地に陥るもので、このときには「逃げるが勝ち」となるのである。

『『窮したときこそ冷静になれ』か。案外、部下のほうが冷静にものごとを見ているもんだな。」

三沢は少し自分の力なさにがっくりしながらも、チームという人の集まりがあるからこそ苦境も乗り越えられるのだと、あらためて痛感したのであった。

～プロジェクト打ち上げ会にて～

「カンパーイ！」

「お疲れ様でしたー！（×複数）」※「カンパーイ！」と「でしたー！」が混ざる

（ナレーション）数々の困難を乗り越え、今回はなんとか切り抜けられた。ただ、これまでのプロジェクトとはかなりの面で違っていた。それは・・・。（ナレーションここまで）

「ねぇねぇ、係長ぉ～。エリカたちがいちばんお客さんのためになったって本当ですかぁ～？」

「あ、僕もその噂聞きました。本当ですかぁ？」

源、浦成が絡んでくる。

「本当ですか？！それなら、わたしたちも是非お聞きしたいです！」

スタッフ全員が目をキラキラさせながらにじり寄る。三沢は少したじろいだが、すぐに持ち直してみなを制した。※手で「少し下がって、下がって。」といった感じのフリです

「うー。あぁ～。ごほんっ。」

よくある咳払いをして語る。

「そんなことどうでもいいじゃないか。おれたちは、無事にプロジェクトを完遂させた。それ以上なにを望む？きみたちは立派過ぎるほど立派だった。あえて一言いうならば・・・。」

みながゴクリと息を飲む。

「この経験を糧にして、これからもたゆまぬ努力を続けてくれることだけ願う。なにごとも“続けることが難しい”というから・・・なっ？（軽くウィンクをしてみせる）」

「ハ、ハイッ！」（全員）

（ナレーション）こうしてひとつのプロジェクトは幕を閉じた。手痛い失敗は多かったが、なににも代えがたい経験をした。故人に学ぶというのは、『成功に学ぶのではない』ということを三沢は感じ取ったのだ。

そういえば、他の者たちがどうなったのか？これはまた別の機会に・・・。（ナレーションここまで）